

平城宮土器大別の検討(1)

— 前半期SD8600出土土器を中心に —

1 はじめに

「平城宮土器の大別」は8世紀初めから9世紀前半の平城宮出土土器を大きくI～VIIの段階に大別するもので、『平城報告VII』において提示された。そこでは、土師器・須恵器の食器類を中心に、まとまりのある「標式資料」の様相を総体として抽出し、器種・調整手法・径高指数の消長と変化の方向性を把握し、伴出する紀年木簡や遺構の重複関係、藤原宮・長岡宮出土土器等との対比によって年代の一点をおおよそ推定している。各地の物資が集積する遺跡の性格から、土師器・須恵器ともに、産地の違いを念頭に置いて、形態、製作手法、胎土、色調などによる群別についても提示している。その後の調査の進展と良好な標式資料の増加をうけて『平城報告XIII』では、全体的な検討がなされ、『平城報告XI』、『平城京左京三条二坊(長屋王邸)報告』においても部分的な検討、補足がなされている。

ただ、掲げた標式資料は、京城の溝、宮殿内の土坑、溝など性格上のばらつきがあり、未報告資料の遺構名だけを示したものもある。また、例えば、土師器食器類の調整手法別出土比率の違いは、年代、遺構の性格、作り手、生活様式、使用階層の問題などが複雑に絡まって反映されていることが考えられるが、個別の土器群について、その実態の具体的な把握がなお十分でない状況のままに、とりわけ年代観に偏重した認識がなされるきらいがあることも事実であろう。

これらの問題点を念頭に置きつつ、未報告資料を中心に実態検討の積み重ねが必要であるとの認識のもと、まずは奈良時代前半期の土器について行うことにした。

2 斜行溝SD8600出土土器

遺構と層序 斜行溝SD8600は東院西辺地区に位置し1977年の第104次調査で検出した素掘溝である。調査区内を北東から南西に斜行し、調査区南寄り以南折してほぼ方位に沿って南流する。斜行部は長さ約70m、南流部は長さ約22m分を検出。中央部分では溝幅約3.0m、深さ0.6mで、兩岸をシガラミで護岸する(1977平城概報)。

溝の土層は大きく4層あり、最上層は埋立土である。

堆積層は下層(白色砂)、中層(灰色砂)、上層(灰黒色粘質土・黄灰砂)の3層に大別され、上層は滞留を推定させる。出土遺物は上層が最も多く、ついで中層となり、下層からはほとんど出土していない。SD8600からは中層から1点(和銅2年)、上層から8点(和銅4年～和銅8年)、計9点の紀年銘木簡が出土し(平城木簡概報12)、溝の存続期間や土器の年代の一端を示すと同時に、平城宮東院地区の造営が遷都当初から行われたとする有力な根拠の一つとなっている。

出土土器の特色 ここでは斜行部の中・上層出土品についての概要を述べる。時期的には、奈良時代前半期の土器が最も多く、ほかに古墳時代の埴輪・土師器・須恵器、7世紀後半の須恵器と、混入とみられる奈良時代後半の土師器・須恵器が僅かに含まれる。

出土土器の点数(口縁部を中心とした概数)は、中層は139点。内訳は土師器102点のうち食器61点、貯蔵器1点、煮炊具40点で、須恵器37点のうち食器22点、貯蔵器15点である。いずれも小片が多いものの土師器杯や皿には藤原宮出土品と酷似したものもある。上層出土土器は大片が多く518点。内訳は土師器372点のうち食器236点、貯蔵器4点、煮炊具は132点で、須恵器は146点のうち、食器が100点、貯蔵器は46点である。

土師器-須恵器の出土比率は、中層で73%-27%、上層で72%-28%でほぼ同様の比率を示すが、上層出土の須恵器貯蔵具の76%が水甕と推定される甕Cである。また灯火器として使用された土器の多い傾向がみられるほか、中層出土の陰刻唐草文須恵器杯蓋の存在が注目される。

土師器杯A・杯Cの多様性 出土量が多い土師器杯AI・杯Cについて、他の土器群とも比較した分析所見を記しておく。土師器杯Aの調整は、底部外面をヘラケズリし、口縁部外面を磨く、いわゆるb1手法が大半を占める。一方、内面の調整は、暗文を施すものと無暗文(5)のものに大別され、暗文を施すものは、①内底面に螺旋状暗文、口縁部に二段放射状暗文(螺旋+二段放射と省略、以下同じ。3)、②螺旋+一段放射・連弧(4)、③螺旋+一段放射の3グループに分類できる。土師器杯Cは「小さな平底ないし丸底と斜め上にひらく口縁部からなり、口縁部端面が内傾するのが特徴である」と説明されている(平城報告XVI)。斜行溝SD8600出土品では口縁端部の形態に多様な様相が抽出できる。すなわち、口縁部内側が

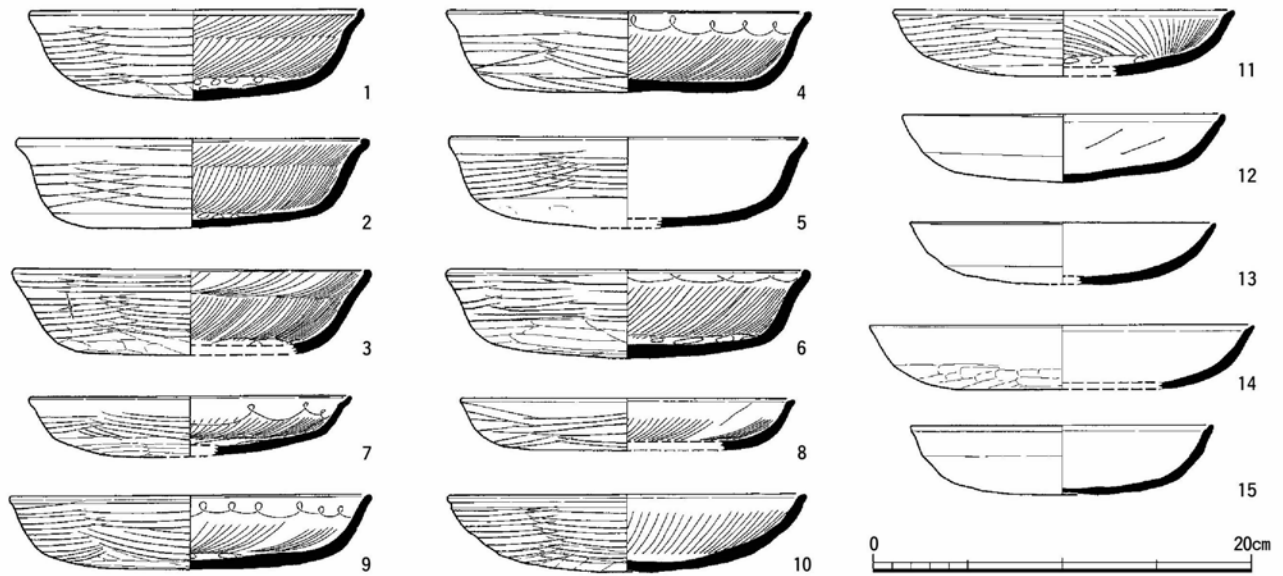


図21 平城宮土器Ⅰ 土師器杯A・杯C (1:SD2300 2:SD1900 3~5・7~15:SD8600 6:SK8630)

凹線状をなすもの(a形態)と、凹線状をなさず丸く納めるもの(b形態)があり、さらに、a形態は凹線を内端面に施すもの(7)と上端面に施すもの(8)、b形態は尖り気味に丸く納めるもの(9)、外面がわずかに肥厚するもの(10)に細分できる。また、内面の調整では暗文を施すもの(7~11)と無暗文(12~15)とがある。

SD8600の杯CIの暗文構成は、杯AIと同様に②、③のグループが存在するが、②グループが出土量の大半を占め、暗文構成③のグループには反時計回りに幅広い放射暗文を施す例(11)などがみられる。無暗文の杯Cには、形態や胎土は有暗文の杯Cと同じであるが、撫で調整のみで仕上げるもの(12・13)や、底部外面に削り調整を施すもの(14)、胎土に多くの砂粒を含み撫で調整で仕上げるもの(15)などがある。

暗文構成 以上のように土師器杯AI、杯CIは極めて複雑な様相を示すことが判明した。暗文構成の変遷過程は器種ごとに消長が異なるので、最後に杯AIをとりあげて問題点解決の方向性を提示しておきたい。

土師器杯Aの暗文構成は、大勢として、①→②→③の変化の方向性が明らかになっている。しかし、それらのグループがそれぞれ単独で出土することは、量的に少ない場合を除けば極めて稀で、斜行溝SD8600も例外ではない。各地から物資が供給され、しかも、約70年間改変を繰り返しながら連続的に営まれた平城宮跡の特殊性や出土遺構の性格に起因するものかもしれないが、斜行溝SD8600出土の杯Aでは暗文構成①グループが26点、②グループが24点とほぼ同数であり、少量出土する暗文構成③グループや無暗文杯Aを加えるとさらに複雑となる。この状況は、以下の理由からも「時期の異なる型式が混在する」とみるよりも「異なる型式が併存する」とみるべきであると考えられる。

理由イ：斜行溝の暗文構成①の杯Aは、年代的に先行

する藤原宮跡内濠SD2300(1)や平城宮跡SD1900(2)出土の同構成の杯Aよりも、径高指数、調整手法、口縁巻込部の大きさ、底部の平底化、暗文の密度と傾斜、二段放射暗文帯の比率などの点において後出的傾向にある。

理由ロ：暗文構成②の杯Aは、第104次調査区土坑SK8630出土同構成杯A(6)よりも型的に先行する。

理由ハ：暗文構成①、②は長屋王邸とされるSD4750でも併存し、出土状況からは両者を分離できない。

以上のことは、特定の器種における暗文構成の変化は一系統ではなく多系統が存在することを示唆する可能性があり、胎土や色調による群別や調整手法の違いを含めた総合的かつ時系列的な検証を必要としている。

3 おわりに

前述までに、「平城宮出土土器の大別」検討の一端として、前半期(I・II)の土師器食器類についての視点をまとめた。「大別」では平城宮出土土器は、胎土、色調、手法などによって、土師器が2群、須恵器は6群に分けられ、各群の産地同定も進められている。ただ、貴族の邸宅や官衙単位での土師器生産が確認されることからみても、平城宮の土師器が2群で収まるはずがない。土師器煮炊具では「調整手法による地域色」が提唱されており、上述の「口縁形態」などによる細分もこれと無関係とは考えがたい。また、奈良時代前半期の土器は都が飛鳥・藤原地域にあった時期に成立した土器様式の延長線上に存在するものであり、共通の視点にもとづく通時的な分析は、遷都にともなう土器供給形態変更の有無だけでなく、土器の生産、流通、消費の体系を解明する重要な手がかりとなる。土師器に関しては、群別をさらに進めるとともに、通時的検討を経て、各群の器種ごとの型式組列を構築する作業が必要である。

(川越俊一、渡邊淳子／客員研究員・西口壽生)